

西洋古代文化史特講（9）

デロス同盟結成直後の前四七二年に上演されたアイスキュロスの『ペルシア人』において愚かで傲慢、決断力に欠け他人の意見に流されやすく柔弱で怯懦なクセルクセス像が創作され、サラミスにおけるアテナイ人の勝利を引き立てるのに利用されたのである。つまりギリシアの文献を通じて今日我々が知っているクセルクセスとはこのような前五世紀アテナイの歴史的産物であった。ではギリシア人が伝えてきたクセルクセスとは違った姿とはどのようなものになるのか。歴史上のクセルクセスに接近していこうとするのが本稿の目的である。

クセルクセスの出自

ダレイオスには二人の后がおり、最初の后との間に四人の男子、二人目の后との間に三人の男子がいた。年齢的には最初の后との間に生まれたアルトバザネスが上であったが、ダレイオスの後継者とされたのはクセルクセスであった（Hdt. 7. 2. 2-3. 4）。クセルクセスはダレイオスとアトッサとの間に生まれた長男である。長くダレイオスの後継者と目されてきた（後継者指名に占めるキュロスの孫だというクセルクセスの血統上の位置の重要性をヘロドトスが指摘していることに注意：Hdt. 7. 3. 4.）。ペルセポリスの宝庫「九九柱の間」の東側の中庭で発見されたレリーフは椅子に腰を卸しているダレイオスの後ろに、ダレイオスと同じ衣装を身に纏いダレイオスと同じ高さで立つ人物を描いているが、この人物こそはクセルクセスその人であった（ペルセポリスの宝庫のレリーフについては伊藤、一九七九年、図版 XV および一三五-七頁の説明文）。

クセルクセスは父の生前に他の兄弟を差し置いて父ダレイオスからダレイオスに「次いで pasā」クセルクセスを「最大者 maθišta」としたことを誇らしげに書き記している（「ペルセポリス f 碑文」、27 - 34 行：伊藤、一九七九年、一三〇・一頁。pasā tanūm maθišta-の意味と解釈については伊藤、一九七九年、一三二・七頁）。兄弟やいとこは数多く、その中にはギリシア遠征の先鋒となったマルドニオスも含まれる（A. R. Burn, *Persia and the Greeks*, Stanford, 1984^{2nd} ed., pp.332-336）。これらの王族は平時にあつては属州総督として、戦時にあつては軍司令官として帝国を支える藩屏となったのである。その意味でクセルクセスはそのような人材に恵まれていたと言える。王族や貴族とりわけ「七人」の子孫の間に波風が立っていないことは帝国の安定にとって重要なことであった。

アイスキュロスは『ペルシア人』のなかでクセルクセスを ve/og（若造）とダレイオスに呼ばせている（Aisch. *Persae*, 782）。これは能力も経験もない若造であるクセルクセスがマルドニオスらの悪い仲間に誘われて無謀にもギリシアへの遠征を企てたと非難するアトッサに応える場面で使われる言葉であるが（Cf. Aesch. *Persae*, 753-758. クセルクセスの叔父アルタバノスはマルドニオスに対して王を唆してギリシア遠征を煽動していると非難している：Hdt. 7. 10）、ギリシア遠征当時のクセルクセスの年齢が若造だったのかについては

疑問がある。クセルクセスは前四八六年の即位時に三〇歳ないしは三五歳くらいだったと推定されている (Briant, 1996, p.536 (2002, p.520))。そうすると六年後のギリシア遠征時には三六歳ないし四一歳という正しく脂の乗り切った年齢 (a0kmh&) に達しており、アイスキュロスが此処で若造と呼ばせているのは適切ではない。ちなみに父ダレイオスがカンビュセス急死後の混乱に乗じてペルシア王に即位したのが二六歳前後であったことを考えると年齢の点でクセルクセスが論難される理由は何もない。